中世における「テトラビプロス」の伝承の研究

山 本 啓 二

1. はじめに

2世紀のアレクサンドリアで活躍した天文学者プトレマイオスは、一般に「テトラビプロス」と呼ばれる占星術書著者である。プトレマイオスは、当時の占星術を学問として確立するために、その根拠にギリシア哲学を導入した最初の人物であった。この書はギリシア世界では圧倒的な影響力を持つに至り、複数の注釈書が書かれた。その後、7世紀にはシリア語に翻訳されたが、訳者は当時を代表する知識人のひとりであるセーポフトだとしている。またイスラーム世界では、8-9世紀に2度にわたってアラビア語に翻訳された。その後この翻訳をもとに何度か注釈書が書かれたことが知られている。さらに、11世紀にはアラビア語テキスト全文に注釈をほどこした大部なものまで現れた。

他方、ラテン世界では、12世紀になってアラビア語版からラテン語訳があらわれ、13世紀には、前述のアラビア語の全文注釈テキストがラテン語に翻訳された。そして、これらはともに、印刷術が発明されて間もない15世紀にヴェネツィアで出版されるに至ったのである。

本研究の目的は、古代・中世を通じて占星術の「バイブル」と呼ばれ、さまざまな分野に多大な影響を及ぼした「テトラビプロス」の2つのアラビア語版をもとに、一方ではギリシア語の原典、注釈書、およびシリア語版と比較し、それぞれがどのような系統関係にあるかを調べ、他方では、ラテン語版と比較し、アラビア語版がどのように西欧に伝承されたかを調べることである。本稿ではその研究の一部を報告したい。

2. 従来の研究

「テトラビプロス」はその名のとおり4巻から構成されており、写本によっては「アポテレスマティカ」とも呼ばれる。内容は、第1巻が占星術専門用語、第2巻が多くの人々に関わる一般占星術についてであり、特に12、14章は気象学を扱っている。また、第3巻と第4巻は個人に関わる占星術であり、第3巻の11-14章は気質や肉体的・精神的病について書かれている。ギリシア語版原典の刊行の歴史は古く、まずカマラリウスが1535年にニュルンベルクから出版し、これに続いてランピトンが1553年にパーゼルから出ている。近代になってからは、まず1940年に、F.ポールとその弟子のE.ブールがライプツィヒから、一方、F. E.ロビンズが英語訳との対訳でロウブのシリーズで出版した。その後、1985年にS.フェラボーリがイタリア語訳との対訳でヴィチェンツァから出版し、最新のものは、W.ビューブナーがドイツ語のシリーズで1998年に出版されたものである。近代の校訂版に用いられているギリシア語写本は、主に13-15世紀のものであり、ギリシア語
で書かれた注釈書のうち、現在まで伝えられているものは、哲学者のボリュリオス(234-305)とプロクロス(412-485)によるものである。

シリア語訳は、パリの国立図書館に写本が断片的に残されているのみであり、現在ドイツ人研究者Edgar Reichによって校訂版が準備されつつある。また、後で述べる2種類のアラビア語訳は、現在、筆者が校訂版を準備中である。ラテン語訳は15世紀に出版されたものであるだけで、校訂版はない。すなわち、現在までに出版されている校訂版は、ギリシア語原典だけである。このような状況だから、いかに今まで「テトラビプロス」の伝承の研究がなされていなかったかということがわかる。1907年に、イタリア人科学者C. Nallinoがひとつのアラビア語写本に基づいて「テトラビプロス」に触れ以来この1世紀の間、1980年代にアメリカの天文学家G. Salibaがその重要性とシリア語訳の存在に言及した程度である。

3. アラビア語訳

10世紀のイブン・アン＝ナディームによる書誌文献『フィブリスト』には、アッパース朝第2代カリフ、マンスール(位754-775)の時代にアル＝バトリク(あるいはアル＝ビトリク)が、占星術師であったウマル・イブン・アル＝ファッルハーン(762-812)のために、ブトレマイオスの「テトラビプロス」を翻訳し、ウマルはその著作の注釈者であったと書かれている。現在のアラビア語写本は、ウマルに帰される注釈（以後ウマル版と呼ぶ）のみであり、3種類の写本が知られている。

同じく『フィブリスト』によれば、イブラーヒーム・イブン・アッ＝サルト(9世紀)が「テトラビプロス」を翻訳し、フナイ・イブン・イスハクがそれを改訂し（以後フナイ版と呼ぶ）。サービト・イブン・クフラ(836-901)第1巻のみを要約し、その意味を明らかにしたことがある。フナイは809年ころに生まれ、873年に亡くなるまでバグダードで活躍した人物である。現在のアラビア語写本はフナイによる改訂版のみであり、イブラーヒームによる翻訳は残っていない。フナイ版の写本は3種類あり、そのうち2種類がサービトの手が加えられたものである。

『フィブリスト』には、注釈者の名前が何人か挙げられているが、それらのうち写本が存在しているのはバッターニー(929年没)だけであり、ベルリンに1種類のアラビア語写本があるだけである。これは明らかにフナイ版に基づいている。11世紀になって、カイロのアリー・イブン・リドワーン(998-1061)という医者が、フナイ版の全文を引用して、それに注釈を施しているが、この写本は少なくとも12種類が確認されている。

アラビア語からラテン語への翻訳について言えば、フナイ版は1138年にティヴォリのプラートネによってラテン語に翻訳され、1484年と1493年にヴェネツィアで、また1533にはバーレルで出版された。一方、アリー・イブン・リドワーンによる注釈書は、カスティーリャ王アルフォンソ10世の命で1256年にバルマのアエギディウス・デ・テバルディスによってラテン語訳されて、1493年にヴェネツィアで出版された。その他にも1206年に作られた訳者不明のラテン語訳も存在している。
4. アラビア語写本

上で述べたアラビア語写本の一覧を挙げると、以下のようなになる。現在確認されているすべての写本を網羅している。ただし、リドワーンによる注釈の写本は、コピーが手元にあるものに限定した。

〈ウマル版〉

K = Cairo, Ḥātīl Āgā, miqāt 5, ff. 52 (1250 H).
L = Cairo, Dār al-kutub, miqāt 123, ff. 75 (1250 H).
U = Uppsala 203, pp. 2-151 (1304 H).

K と L は同系統にあり、ほとんど一致している。U の冒頭には、ウマル自身の序文があり、それに
はウマルの没年であるヒジュラ暦 196 年シャッワール月（西暦 812 年 6 または 7 月）に書かれたこと
が記されている。

〈フナイン版〉

C = Cairo, Dār al-kutub, miqāt 1054, ff. 1b-103b (1100 H).
D = Dublin, Chester Beatty 4566, ff. 1a-49a (10C H).
E = Escorial 1829/1, ff. 6b-118a (年代不明)。
F = Firenze, Laurenziana 352, ff. 1b-236a (893 H).
N = Nağaf, Maktabat al-Imām al-Ḥākim 236, ff. 1b-72b (1136 H).
T = Teheran, Aṣḡar Mahdawi 486, ff. 1a-175a (1027 H).
Z = Damascus, Zāhirīya 7974, ff. 1a-70b (年代不明)。

系統は大きく 2 つに分けられ、一方は CFZ のグループであり、他方は EDNT のグループである。D
は第 1 巻 9 章から第 3 巻 3 章までしか不完全なもので、まだ不明な点が多くある。また、CZ, NT
はそれぞれ近い関係にある。E の著しい特徴は、欄外にさまざまな翻訳や注釈を書き込んでいること
であり、そのひとつが、サービト・イブン・クッラによる説明である（「サービト」として引用）。そ
の他の注釈者としては、ウマル・イブン・アル＝ファルバーニ・アッ＝タバリー（「タバリー」とし
て引用）、さらにはアル＝フサイン・イブン・ユーニス、アル＝フサインという名前が確認できる。
その他にも未確認のものがある。さらに、1 節所だけであるが、「別の訳」として引用されている所
がある（第 1 巻 1 章 14 節）。これはウマルが基にした、アル＝バトリーの訳だと考えることもできる。

写本に見られるアラビア語のタイトルは、

FZ — Kitāb al-arba‘ maqālāt ft l-ahkām li-Baṭṭilmūs al-Qalawdī tarqama Ḥunayn bn Isḥāq ışlāḥ Tabit bn Qurra al-Ḥarrānī（ブトレマイオス・クラウディウスの判断に関する 4 巻の書。フナイン・イブン・
イスハーク訳、ハッラーン出身のサービト・イブン・クッラ改訂）。

CTN — Kitāb al-arba‘ maqālāt ft l-ahkām li-Baṭṭlamiyyūs ışlāḥ Ḥunayn bn Isḥāq（ブトレマイオスの判断
に関する4巻の書。フナイン・イブン・イスハク改訂）

E – Kitāb al-arba‘ li-Baṭlamiyūs fī l-qadā‘ bi-n-nuṣūm ‘alā al-ḥāwādiḥ（ブトレマイオスの、星による出来事の判断に関する4巻の書）。

Cのタイトルだけについて言えば、内容に反してNTとの類似性を見せている。またFZは、フナイン訳でサビト改訂としている点で特徴的である。それらに比べて、Eだけが全体的に異なるタイトルを持っていることが注目される。

〈バッターニーによる要約〉

B = Berlin 5875, ff. 1a-62b（年代不明）。

第1巻の1-7章、9章、15章-22章、第2巻の1-2章、4-5章に対する注が欠けている。「フィリスト」では、バッターニーは注釈を残したことになっているが、この写本に関して言えば、それは注というよりもフナイン版の要約と呼ぶべきものである。

〈アリー・イブン・リドローンによる注釈〉

1. Teheran, Mağlis 191, ff. 1b-124b (1284 H).
2. Oxford, Bodleian Marsh 206, ff. 1b-200b（年代不明）.
3. Princeton, Yahuda 3515 = Mach 5050, ff. 1b-144b (8-9C H).
4. Escorial 913, ff. 1b-126a (745 H).
5. Escorial 916, ff. 1b-129b (10C H).
6. Rampur 4188, ff. 1b-104a (17C AD).
7. Rampur 4189, ff. 1b-279b (1711 AD).
8. Patna 2474, ff. 1b-190b (1159 H).

リドローンはフナイン版を基にしており、各巻をさらにそれぞれ3部に分けている。第1巻は第1部(1-3章）、第2部(4-17章）、第3部(18-24章）、第2巻は第1部(1-3章）、第2部(4-9章）、第3部(10-13章）、第3巻は第1部(0-5章）、第2部(6-10章）、第3部(11-14章）、第4巻は第1部(1-3章）、第2部(4-8章）、第3部(9章）となっている。

5. ギリシア語原典、シリア語版、アラビア語版の対照

それぞれの章区分は、以下のようなになっている。ギリシア語原典はW. ヒューブナーによる校訂版に基づいており、章区分だけでなく節区分もそれに基づいている。

シリア語訳に関しては、パリ写本346と392がある。346は表にあるように、冒頭から第2巻の9章15節までと、第3巻の3、4章が欠落している。ただし第2巻の3章33節の一部は断片的に残っている。もうひとつのパリ写本392については、全体で8フォリオのみの断片であり、第1巻の2、3、9、11-13、21章、第2巻の1、3、8章、第3巻の2、3章のそれぞれが断片的に残っているのみ
である。

ウマル版は、比較的ギリシア語版に近いが、第1巻の9章と21章が細分化されている。フナイン版は、まず第2巻の2、3章がギリシア語版と異なっており、さらにギリシア語の第3巻1章は、フナイン版では1章の前に置かれ、第4巻の1, 2章はひとつの章になっている。

<table>
<thead>
<tr>
<th>Part I</th>
<th>Part II</th>
<th>Part III</th>
<th>Part IV</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 1</td>
<td>1 1</td>
<td>1 1</td>
<td>1 1</td>
</tr>
<tr>
<td>2 2</td>
<td>2 2</td>
<td>2 2</td>
<td>2 2</td>
</tr>
<tr>
<td>3 3</td>
<td>3 3</td>
<td>3 3</td>
<td>3 3</td>
</tr>
<tr>
<td>4 4</td>
<td>[1]-[2]</td>
<td>2</td>
<td>4 4</td>
</tr>
<tr>
<td>5 5</td>
<td>[3]-[50]</td>
<td>3</td>
<td>5 5</td>
</tr>
<tr>
<td>6 6</td>
<td>4 4</td>
<td>3 4</td>
<td>6 6</td>
</tr>
<tr>
<td>7 7</td>
<td>5 5</td>
<td>4 5</td>
<td>7 7</td>
</tr>
<tr>
<td>8 8</td>
<td>6 6</td>
<td>5 6</td>
<td>8 8</td>
</tr>
<tr>
<td>9 9</td>
<td>9-11</td>
<td>7 7</td>
<td>9 9</td>
</tr>
<tr>
<td>10 10</td>
<td>12</td>
<td>8 8</td>
<td>10 10</td>
</tr>
<tr>
<td>11 11</td>
<td>13</td>
<td>9 9</td>
<td>11 11</td>
</tr>
<tr>
<td>12 12</td>
<td>14</td>
<td>10 10</td>
<td>12 12</td>
</tr>
<tr>
<td>13 13</td>
<td>15</td>
<td>11 11</td>
<td>13 13</td>
</tr>
<tr>
<td>14 14</td>
<td>16</td>
<td>12 12</td>
<td>14 14-15</td>
</tr>
<tr>
<td>15 15</td>
<td>17</td>
<td>13 13</td>
<td>15 16</td>
</tr>
<tr>
<td>16 16</td>
<td>18</td>
<td>14 14</td>
<td>16 16</td>
</tr>
<tr>
<td>17 17</td>
<td>19</td>
<td>18 18</td>
<td>17 17</td>
</tr>
<tr>
<td>18 18</td>
<td>20</td>
<td>19 19</td>
<td>20 20</td>
</tr>
<tr>
<td>19 19</td>
<td>21</td>
<td>21 21</td>
<td>22 22</td>
</tr>
<tr>
<td>20 20</td>
<td>22</td>
<td>22 22</td>
<td>25 25</td>
</tr>
<tr>
<td>21 21</td>
<td>23-25</td>
<td>26 26</td>
<td>27 27</td>
</tr>
</tbody>
</table>

6. サービト・イブン・クッラの関与

すでに述べたように、フナイン版は後にサービト・イブン・クッラによって第1巻の意味が明らかにされたことになっている。サービトの手が加えられている写本は、CZのみであり、そこには「サービトは言った……」という文が挿入されている（第1巻で11箇所、第2巻で2箇所）。また上述のようにEの欄外にもそれが書かれている（第1巻で7箇所、第2巻で3箇所）。これらの写本が、実際にサービトが手を加えたテキストを伝えているとすれば、彼が行なったことは、ほとんどが語句の
7. まとめ

中世における「テトラビプロス」の伝承を表にすると、ほぼ以下のようになる。※はテキスト資料が現存しないことを示している15

Hieronymus Wolf によって 1559 年にパーセルから出版されている。また、St. Weinstock と E. Boer による校訂版が、Catalogus codicum astrologorum Graecorum, V 4, 1940, pp. 187-228 にある。このテキストは全 55 章からなっている。

このテキストは、1554 年にパーセルでメランヒトによって、また 1635 年にはライデンでアッラティウスによって出版されたが、近代の校訂版はない。なお 1822 年に、J. M. Ashmand によって、1635 年のライデン版から英語訳が作られている（Ptolemy's Tetrabiblos or Quadripartite : being four books of the influence of the stars. Newly translated from the Greek paraphrase of Proclus）。

注

1. Hieronymus Wolf によって 1559 年にパーセルから出版されている。また、St. Weinstock と E. Boer による校訂版が、Catalogus codicum astrologorum Graecorum, V 4, 1940, pp. 187-228 にある。このテキストは全 55 章からなっている。

2. このテキストは、1554 年にパーセルでメランヒトによって、また 1635 年にはライデンでアッラティウスによって出版されたが、近代の校訂版はない。なお 1822 年に、J. M. Ashmand によって、1635 年のライデン版から英語訳が作られている（Ptolemy's Tetrabiblos or Quadripartite : being four books of the influence of the stars. Newly translated from the Greek paraphrase of Proclus）。

Greek Original (c. 150)

<Greek commentaries>
Porphyrios (3C.)
Proclos (5C.)

<1st Arabic translation> <2nd Arabic translation and commentary>
al-Baṭrīq abū Yahyā Ibrāhīm b. aṣ-Ṣalt (9C.)
b. al-Baṭrīq (8C.)

<Commentary> 'Umar b. al-Farrajān at-Ṭabarī (762-812) Ḥunayn b. Ishāq (809-873)

<Correction>

<Commentary> Tābit b. Qurra (836-901) al-Battānī (d. 929)

<Summary>

<Commentary>
*an-Nayrizī (d. 922) ‘Alī b. Ridwān (998–1061)

<Latin translation>
Plato of Tivoli (1138)

<Latin translation>
Aegidius de Thebaldis (1256)
3. シリア語写本に関する情報は、Edgar Reich 博士の未発表の研究による。この場を借りて同博士に感謝の意を表したい。
10. ただし、Z は Kitāb al-arba’ maqālāt fī l-ahkām の部分が読み取れない。
11. ただし、T は li-Baṭlīmus。
15. この表には含まれていないが、「フィフリスト」によれば、エウトキオス (5 世紀) が第 1 巻の注釈を書いたことになっている。エウトキオスが、アポロニオスの『円錐曲線論』やアルキメデスの『球と円柱』、『円の計測』、『平面板の平衡』の注釈を書き、『円錐曲線論』の注釈がアラビア語に翻訳されたことは知られている。しかし、『テトラピプロス』の注釈についてはギリシア語でもアラビア語でもテキストが何も残っていない。ちなみに、エウトキオスに帰される占星術的なアフィリミズムは残っていて、6 写本が確認されている。そのうち少なくとも5 写本の冒頭には、「ブレマイオスの『テトラピプロス』の注釈者エウトキオスは言った」と書かれている。